OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

香川大学経済論叢
第71巻 第4号 1999年3月 307-336

研究ノート

ゲーテの詩について

—躍動する生命の輝き—

瀧 川 一 幸

まえがき

この小論は，短歌会「水甕」の全国大会で講演したものに手を入れたものである。講演は，元来ゲーテの詩の紹介的な意味合いもあり，時間制限もあったために，ゲーテの何千という膨大な詩から5つの詩をピックアップし，ゲーテの詩からゲーテの自然観まで視野を広げて，短時間では紹介しがたいゲーテの詩の世界のエッセンスを述べんとしたものである。選び出した詩は，（1）よろこび (die Freuden)，（2）五月の歌 (Mailied)，（3）旅人の夜の歌 (Wandrers Nachtlied)，（4）植物の変態 (Die Metamorphose der Pflanze)，（5）変転の中の永続 (Dauer im Wechsel) である。（1）を除けば皆有名な詩で，（2）はゲーテの青春期の絶唱，（3）は前期ワイマール時代の代表的な詩であるばかりでなく，ゲーテの詩のもっともよく知られた詩でもある。従って詩聖と言われるゲーテの詩であるから，ドイツの叙情詩の傑作と言っても過言ではない詩である。（4）は，ゲーテの自然科学研究の中から生まれた詩で，一種の思想詩でもあり，ゲーテの自然科学研究へと繋がる詩である。（5）は，ゲーテの哲学的な意味もある，老年期の自然観を歌う哲学詩へ繋がる詩である。こうした詩は，それぞれゲーテの多面的な分野の側面も代表し，ゲーテの詩の世界の広さと深さを知っていただけると考えて選んだものである。ただし，この5つの詩ではどうしても大きな欠落部が残る。それはゲーテの愛の詩である。そのため，途中でゲーテの女性観を述べる部分を挿入するという構成を取った。

ゲーテの詩の世界の理解には，現在は極めて不幸な面がある。それはいろいろあるが，特に現在が自然を失っている時代であること，また現代人の生活が極めて専門化

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

し，分化し，ここにも人間の大きな自然離れが起こっていることである。先ず最初の理由である点は，ゲーテ世界の根幹をなす「自然」が現在ものすごいスピードで失われている点である。ゲーテは，1749—1832 年の生涯から見ても分かろうが，産業革命直前の時代を生きた詩人である。自然がたっぷりと残っていた時代である。電気もなく，鉄道も自動車もなかった。夜は本当に暗く，月光は絶好の詩の材料であった。室内はランプの光の時代である。ゲーテの旅は馬車の旅である。一日はゆっくりと流れ，ゲーテがたびたび歌ったバラの花は，現代の華麗な大輪の花ではなく，種の改良を受けない自然のままのもっと小さなバラであった。ここで取り上げた「五月の歌」は，そうした人間がまだどこにでも本来の自然と対面できた時代の詩である。しかし現在は，まったき自然などというものはもはやどこにもないと言ってよい時代であろう。かろうじてまだ自然と呼べる自然に出会うためには，人は 3 — 4 時間以上時間をかけて，都会から山中にでも入らないと出会うことが不可能な時代になった。しかし本来的な自然は，他方現在もっとも人間に求められているものであろう。なぜなら人間も本来自然であり，ゲーテの言葉で言えば，自然の頂点に立つ存在であるから，人間から自然が喪失してゆくことは，自己の存在本質を否定していることに繋がっていると言えるからである。そうした意味でもゲーテ理解は，現代の重要な要請と言っても良いのではないだろうか。

この小論は，もちろんそうした点を本格的に論じたものではなく，ただのゲーテの詩的世界の紹介を目指したものである。しかしゲーテの世界の紹介は，根本的にこうした時代の相違に訴えるものを持っていると考える。そういう意味で，この小論を活字にしておきたいと願ってここに原稿を寄せた。

1．ゲーテの生涯の簡単な紹介

ゲーテは，高名な詩人で，皆様も一度や二度はどこかで名前を聞いておられることと思います。しかし，高名な人であるわりには，では，どんな人であったのかとお聞きしますと，たぶん，知らないと言われる人の方が多いのではないかと思っています。私は，今日は，ゲーテがどんな人であったかということより，むしろ，ゲーテの詩の一端に実際に触れていただき，ゲーテの詩的世界を知っていただきたいと希望してい

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ます。しかし，詩はたとえ短くても一つの独立した世界を作っていて，なかなかすぐには理解を許さないものを持っています。そのためどうしても最低限はゲーテがどんな人間だったのか，どんな生涯を送ったのか，簡単に知っていただきたい。そうした方が，いきなり，詩を読んでもらうよりはゲーテ文学の理解が早いかと考えます。

さて，ゲーテは，1749年8月28日にドイツのフランクフルトの裕福な家に生まれました。父親は，名誉を重んじましたので，何か，フランクフルト市に職を得たいと望みましたが，適当な職には就けなかったために，特別の定職を持ってはいませんでした。母親は，市長になった人の娘で，名門の家の出であった。父は39歳，母は18歳の時に結婚しました。そうした裕福な家で幸福な子供時代を送っています。家庭教師の時代で，この頃は，裕福な家の子供は家庭教師について教育を受けています。ゲーテも家庭教師について教育を受けましたが，父親が定職を持っていなかったため，父親自らの教育で，主に語学などを勉強しました。早くから詩を書きまして，お祝いなどの詩を注文されるようなこともあったほどです。大学へゆくまでに，公的な学校にはほとんど行っていません。

さて，大学は，初めは，ライプチッヒ大学に行きまして，一応，法律を学んでいます。父親が望み，また市や国などの公務員のような職に就くことを考えてと思います。しかし，ゲーテは，いわゆるガリ勉タイプではありませんでした。仕送りが豊かだったために，文学好きの仲間と徹底的に青春を楽しんでおります。もちろん，この頃にはたくさんの詩などを書き始めています。しかしまあ，有意義に遊んでいたということでしょうか？　洒落もので，あまりに派手にやりすぎたためでしょうか，ある朝，喀血して眼をさまします。結核性の病気であったと言われています。ゲーテの兄弟は，たくさん生まれたのですが(他に，弟2人，妹2人)，生き延びたのは妹と2人だけでした。その息子が病気で帰郷したのですから，本人も家族も大変落胆したと思います。しかし，幸いなことに，病気は1年半ほどで快癒して，今度は，ライン川上流地方にあるシュトラースブルク大学で勉強しました。病気のせいでしょうか，彼は，ライプチッヒ時代の洒落ものという生活態度を止(や)めまして，非常に人生を深く，まじめに考えるように変わっておりました。ここでも大学では，さまざまな学問領域に深く関心を持ちましたが，試験の成績を上げるような勉強はしておりません。もっぱら文学に

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

熱を上げて，さまざまな作品を書き続けておりました。この時期には，もう，本当に新しい，生命をはつらつと歌い上げるような詩や，文学を書いております。特にシュトラースブルクの北にある田舎，ゼーゼンハイムで，野の花のように美しい，清純なフリーデリケ・ブリオンと知り合って，彼女たちとの交遊から非常に多くの叙情詩の傑作を書いております。後で取り上げる「五月の歌」や皆様もきっとご存じの「野薔薇」などもこの期間に出来ました。シュトラースブルク大学を2年ぐらいで終えまして，一旦フランクフルトに帰っています。そしてしばらくして，弁護士の見習いで，今度は，フランクフルトの北の方にあるヴェツラーと言うところで，実地見習い，まあ法律のインターンのようなことをしました。この時に，ある舞踏会ですでに婚約者もいましたシャルロッテ・ブッフと言う女性に知り合い，一目惚れしました。婚約者がいる女性でしたから，初めから結婚は考えられない恋なので，いわば，出口のない恋に落ちたわけです。ほとんど，自殺さえ考えられるような激しい恋でした。ただし，婚約者のケストナーという男性は理性的な態度で接してくれました。こうして，ゲーテは，自制し，この地を離れています。

ゲーテは，ライプチッヒでも年上の居酒屋の女性に夢中になり，またシュトラースブルクでは，フリーデリケと知り合い，恋に落ちていますが，またここで再び激しい恋に捕らえられています。この時期は，文学史で言えば，シュトルム・ウント・ドラングと言い，日本語では，疾風怒濤の時代と訳されています。未だ，ドイツは，身分制度ががっちりと社会制度として生きており，古くからの考え方がしっかりと社会を支配していました。しかし若い青年たちは，こうした社会に自分たちが希望をもてる未来を描くことが出来ず，鬱屈した思いで生きており，1776年のアメリカの独立，1789年のフランス革命の前夜で，激しい自分たちの感情を文学に表現し，新しい社会への出口を見出そうとしていました。ゲーテのグループもその大きな流れを作っていました。こうした社会状況の中で，ともすれば若い青年がこうした出口のない恋の中で身を滅ぼしてゆく危険な可能性もありました。事実，ゲーテの知人で，イエルーザレムと言う青年は，不幸な人妻への恋でピストル自殺するという事件が起こりました。おそらくゲーテは，この青年の行為の中に第二の自分を見る思いがしたと思います。ゲーテは，フリーデリケと別れた後は，心の中に大きな空洞がぽっかり出来て，何もので

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

も埋められなかったと自伝「詩と真実」に書いております。そしてこうした恋愛の繰り返しの中で，心の鬱屈したものを感じていました。

ところで，こうした心の苦難で，そこを抜け出すゲーテの秘術がありました。それが，ゲーテの文学という術でした。こう言うと，皆様の中には，違った意見をもたれる人もおられるかも知れませんが，ゲーテの自伝「詩と真実」の中には，はっきりとゲーテが文学に向かうようになった経緯が書かれております。それによると，ゲーテは『自分は，感情の激しい人間で，一方の極端から他方の極端へと走りやすく，そのあげく，何をしでかすか分からなくなるような気質の持ち主である。だから，自分は，小さい時から，自分の心を激しく動かしたものを「詩」に変えた』と言っています。実はゲーテの文学の原点は，ここにあります。つまり，自分の心を動かしたものを詩に，つまり，詩や小説や戯曲や自伝など，その形式はさまざまですが，言葉による人物・形姿へと変えたというのです。そして，そうすることで自分が生きている社会に対して正しい関係に再び立ち，また自分の心の苦しみから逃れでたということです。そして最後にゲーテは，ここでこうした自分の文学は，大きな告白であると言っています。神とは言っていませんが，自分の人生を神の前で語ったものが自分の文学であると言っていると考えてもよいでしょう。ゲーテがシャルロッテ・ブッフと知り合い，恋に落ちた時に，この秘薬がよく効いたと書いております。彼は，知人であったイエルーザレムが，似たような状況の中で恋による自殺をした時に，きっと自分の現在の立場を見たと思ったに違いありません。ちょうど，水が氷点を過ぎると一瞬にして凍るように，自分を苦しめた恋を小説にするストーリー（筋）がなったと言います。そして一室にこもり，誰とも会わず，わずか4週間ほどで，名作「若きウェルテルの悩み」を書き上げます。そしてこれが世界的ベストセラーとなりました。「詩と真実」は，自分は，心のうっ屈した苦悩を小説にしたことで心が晴れ晴れとなったが，これを読んだ友人たちは，恋をしたら皆，このようにしなければならないと思って，逆に苦しんだと言っています。また，実際，主人公ウェルテルの服装，黄色いチョッキと青い燕尾服が流行したと言われています。

それはともかく，この小説の成功が，ゲーテの将来に大きな影響を与えたと思います。つまり，ワイマールへの招聘へと繋がったからです。ザクセン・ワイマール・ア

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

イゼナッハ公国と言うのが，正確な名前ですが，ここの領主は，アンナ・アマーリエと言う女性でした。彼女は，結婚後まもなく夫を亡くし，2人の子供を生んでいましたので，若い身空で，女手一つで，国王となる息子を育て，小国とは言え，一国を治めてきていました。そして男児が18歳にならないと国王になれないので，頑張っていました。そしてちょうど18歳になろうとする息子を持っており，この息子を領主にして，自分の国を立派にもり立てようとしていました。特に，小国だったこの国を文化によって立派にしようと考えていました。そして実際，文人たちを宮廷に呼び始めていました。この女性が，将来の国運を考えて，自分の息子の教育者兼顧問というような人間を捜していました。そしてゲーテの中に適任者を見出したのです。こうして，ゲーテはワイマールへ，若き国王の，同僚，教育者，顧問と言うような形で招聘されました。もちろん，この時には，ゲーテは，この地が終生の地になるとは考えてもいなかったのですが，この息子，アウグストも，なかなか御しがたい点もあったのですが，立派な国主になったのです。現在でもワイマールは，小さな都市ですが，ゲーテはじめ，ヘルダー，シラーなどこの宮廷を飾った文人たちのために，教養ある人は誰でもこの小さな町の名前を知っております。またこのことが契機になり，第1次世界大戦後ここで国民会議が開かれ，ここで採択された憲法をワイマール憲法と呼び習わされていることは良く知られています。

さて，ワイマールへ来てからは，ゲーテは，文学と共に若き国主アウグストを助け，教育し，指導し，政治に一生懸命になります。直ぐに枢密院に入りまして，旧の昔からの政治家たちにはこんな若い人間を取り立てたことに大きな抵抗もあったのですが，アンナ・アマーリアやアウグストの助け，また何よりゲーテ自身の努力によって認められてゆき，33歳には，財務長官の仕事も引き受けています。これは，小さい国とは言え，現在では，総理大臣といってよい地位です。

その後，ゲーテは，イタリアに旅行したり，さまざまな自然科学に没頭したり，ナポレオン戦争で，アウグスト公と一緒にフランスまで軍と共に行動をしたりしています。また，晩年，ワイマールは，文人たちのメッカとなり，多くの有名な人々がゲーテを訪ねています。こうした宮廷のさまざまな活動，政治の世界，またこうした活動で広がった人生体験，そしてたびたびなされた旅行など，ゲーテの世界は，普通，小

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

説だけなどの狭い市井の世界しか持っていない多くの他の詩人とは違って，きわめて大きな世界を体験し，それが，ゲーテの文学の原点としての方法で，ゲーテ文学の根底を広げ，深めています。他にもワイマールに来てからさまざまなことがありました。

2．詩「よろこび」について

さて，それではゲーテの詩の実際に入ってゆきましょう。最初は，ライプチッヒ時代の作品の「喜び」という詩です。

この詩は，ゲーテの大抵の詩集に入っております。ライプチッヒ時代の詩は，文学史的には，ロココ時代と言われ，まだフランス文学の影響が強く，文学も理論的で，しゃれた，機知の効いた，よく考えられた詩がよい詩とされていました。この詩も，しゃれており，最後の教訓はロココの特徴をよく表しています。では一度，読んでみましょう。

よろこび (Die Freuden)[1]

泉のまわりをすいすいと
色を変えながらとんぼが飛んでいる
もう久しくぼくはそれを見てたのしんでいる
光るかと思えば　かげり
カメレオンのように
赤くなるかと思えば　青くなり
青かと思えば　灰色になる
ああ　もっと近くで
あの色を眺めることができたなら

とんぼはしかしとまらない　いつまでもすいすい飛び回る

（1） 人文書院刊ゲーテ全集第1巻10ページ。高安国世訳による。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

シッ！　やなぎの葉っぱにとまったぞ
とうとう取ったぞ　とらえたぞ
そこでよくよく眺めると
ああ見すぼらしいくすんだ青の一色きり—
よろこびを解剖する者は　このような目にあうのだ

詩の内容は，きわめて単純です。詩としてそれほど，大きな価値があるとは言われておりません。しかし，私がこの詩を選んだ理由は，ゲーテがきわめて早くから詩の内容となる生命を時間の中の一瞬の時間内に捕らえている点を指摘したかったからです。あらゆる美，感動，ポエジーなどは，この詩のとんぼに似てはいないでしょうか？生きているものは一瞬も活動を止めません。人生のあらゆる行為もあらゆる感動も時の大きな歯車の動きの中にあり，人の止められるものではありません。時間の流れの中にあるからこそ一瞬一瞬きらりきらりと光るのです。こうした生きた美は，人間が捕らえて，ビンで留められるようなものではありません。もし，生命を再現可能にしようとするなら，言葉の力（他に芸術など）に封じ込める場合だけでしょう。詩を人が読む時に，生命がふっと生き返ってきます。ここに詩の言葉の摩訶不思議な力があると言えるのでしょう。

しかし人は誰でもこの真理を知っていながら，人生の一瞬の喜びや悲しみを，トンボを捕らえるように捕らえようとしていないでしょうか？　過去にこだわったり，人生の感激体験を忘れられず，現在に生きず，過去に生きたりはしていないでしょうか？人は一瞬一瞬生きては死に，生きている今を死んでは次の時間へと生きてゆく。そのように生きているのではないでしょうか？　こうした生命観がこの時期にはまだ無意識的であったとしても，すでにわずかですが，この詩に感じられます。それがゲーテの後年の人生観へと成熟してゆくのだと思います。「死して成れ」は，ゲーテの西東詩集の「媾合歓喜」(Selige Sehnsucht)[(2)] にある有名な句で，ヨーロッパのフェニックスなど「絶え間ない再生」を象徴する語句ですが，こうした後期のゲーテのダイナミック

（2）「死して成れ」は，ゲーテの西東詩集の「媾合歓喜 (Selige Sehnsucht)」（ゲーテ全集第1巻 322 ページ参照）にある句。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

な時間認識と生への姿勢へと繋がっていっているように思えます。

3.「五月の歌」について

1771年，シュトラースブルク時代に町の北にある田舎，ゼーゼンハイムで牧師の娘，フリーデリケ・ブリオンと言う少女と知り合いになりました。彼女は，野の花のように美しい清純な少女でした。彼女の牧師館の周りの美しい自然，ドイツと言う北国の遅れてくる春で一年で一番美しい季節，そして美しい，清純な少女。ここでゲーテは，すっかり自然にとけ込み，そしてこの少女を心底から愛しました。そしてたくさんの叙情詩が生まれました。ゲーテの詩集では，ゼーゼンハイム抄と言う名前でまとめられていることが多いと思います。

さて，先ずこの詩を読んでみましょう。

五月の歌 (Mailied)[3]

自然はうつくしく
われに燃え
太陽はかがやき
野辺はわらう

小枝に咲きみつる
花々
しげみを洩るる
鳥のこえ

わが胸にわく
よろこび

(3) 人文書院刊ゲーテ全集第1巻15ページ。大山定一訳による。1771年作。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

おお　大地よ　太陽よ
おお　幸福よ　愉悦よ

恋よ　恋よ
片岡の
朝雲の
あかねさすうるわしさ

よみがえる
野面に
立ちこめし
むらさきの靄(もや)のいろ

少女よ　少女よ
ひとえにわれは愛す
黒き汝(なれ)が瞳を
汝(なれ)もまたわれを愛するかな

揚げ雲雀の
歌と空を
朝ごとの花の
微風を

愛するがごとく
われはあたたかき血もて
汝(なれ)を愛す
われに青春と歓喜と

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

あたらしき歌と
舞踏をおくるもの
とこしえに汝(なれ)は幸なれかし
ひたすらわれを愛しつつ

この詩は，何げなく歌われているようにも見えるかも知れませんが，きわめて明確に若きゲーテの自然の見方を表しています。第1連を見て下さい。ここでは，自然が輝いています。生命力に満ち満ちて，自然は輝いています。太陽が燃え，自然が笑っていると歌われています。自然の機軸が，真正面から歌われています。太陽と野原が呼応して生命に満ち満ちているさまを堂々と歌っています。

第2連では，それを受けて，広々とした自然がずっと身近に引き付けられています。どの枝からも花がほとぼり出てきて，生命力の象徴の花が歌われ，次いで鳥が歌われています。広い自然が急にズーム・アップされたように身近に歌われて，しかも植物も動物もみな，生き生きとしています。

第3連では，最初に自然全体，次に木々の花，鳥と来たのですから，当然その次には，人間が歌われます。春の生き生きした自然の中に生きる人間も生きている喜びが溢れ出ます。そして生きる喜びの歓呼の声が自ずと全自然を，全生命をことほぎます。

第4連は，恋を叫びます。生きているものは，皆，生命の最も美しい感情の頂点，恋を叫びます。ドイツ語では，この語は，Liebe となっていまして，恋と訳されていますが，恋も愛もドイツ語では同じ言葉です。生きている感情に溢れれば，自然と誰もが恋，もしくは愛の感情へと高まるのは当然のことでしょう。こうして詩は，恋の感情に溢れながら，見る眼には，朝の雲に「茜さす」となっていますが，原詩では「金色」となっています。朝の雲に金色に輝く丘が見え，第5連で，野は生き生きと蘇り，花々で霞みます。

第6連では，周りの生命の賛歌を愛でて，少女よ，少女よ，ひとえに我は汝(なれ)を愛すと高らかに愛の宣言をします。この辺りは，原詩では，力強くリズミカルに生命に満ち満ちた自然を歌い上げています。こうした生命力の中で歌われる「汝(なれ)」は，どこどこのA子さんやB子さんではありません。生きとし生きるものの命としての「あなた」

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

なのです。社会的な自我とか，固有名詞のついた誰々さんというのではなく，我々皆，生きています。その生命としての君と僕なのです。そして互いが，互いの眼の中に同じように，生きている歓喜と愛を認めています。いわば，自然の生命の祭りの中で愛し合っています。愛は，この場合，生命力の中の最も深い核心を作っている美しい感情ではないでしょうか？　そして第7連では，「雲雀の歌のように，朝の花が微風を愛するように」と比喩が入りますが，この愛が，青春と生きる歓喜を贈ると歌い，そしてこの生命力の賛歌から新しい文学が生まれると叫んでいます。いわば新しい時代の宣言のように。

これは，ゲーテの基本的な文学観・生命観を表しています。ゲーテは，終生，自然に頭を下げました。自然というと，最近では，ニュートン力学が打ち立てた近代科学的な自然という概念にじゃまをされて，何か，人間がすっかりと征服できると言うような幻想を抱くような考え方があります。何か，自然のメカニズムを解いてしまえば，自然は征服できると言うような考え方があります。しかしゲーテの自然は，こういう「自然とは大きな機械」と言うような自然ではありません。まさにこの詩に歌われた「生命としての自然」なのであります。ありとあらゆるものには，生命があり，それは一瞬も生きる活動を止めない。我々もその大きな流れの中に生きています。ゲーテの眼は，すべてのこの生命力へと注がれます。木も，花も，動物も，鳥も，勿論，人間も生きています。あらゆるものがこの世にひしめきながら生きようとして生まれでてきます。そして一瞬もその活動をやめません。こうしたきわめてダイナミックな生命観がゲーテの生命観です。勿論，ゲーテは，こうした生き物だけではなく，後年の自然科学研究の中で，石や岩や地球や，また気候のようなものにすら，こうした生きる脈動を感じていました。人は笑うかも知れないがと断わって，「イタリア紀行」の中で，地球は脈動しており，その動きが雨や霧や雲などの生成の原因になっているのではないかと言うようなことを言っています。こうした生命観は，哲学では，汎神論と言われていますが，ゲーテはその代表者といえるでしょう。どんな小さなものにも生きている力を見るのです。神と言ってもよいでしょう。こうした見方は，突き詰めれば，この世は，神の作った衣です。一瞬一瞬，神が機織機械のように，縦糸と横糸を絡ませているのです。その不思議をゲーテは見ているのです。そしてこういう点が，

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

何か，あらゆるものに仏性を見る仏教に一脈通じるところがあるかも知れません。そしてここがゲーテの詩を日本人に親しくさせている様な気がします。

4．旅びとの夜の歌（Über allen Gipfeln）(4)

さて，この詩は，ゲーテの一番有名な詩と言われています。ゲーテの詩の中で，日本で一番有名な詩は，おそらく「野薔薇」でしょう。なんと言ってもシューベルトやヴェルナーの作曲でたいていの人がゲーテの詩と知らないで，「童（わらべ）は見たり」と歌ったことがあるでしょう。そしてドイツでは，この詩は80曲以上作曲されているという研究もあります。しかし，この「旅人の夜の歌」は，130曲以上作曲されたと言われています。そして，読んでみますと何でそんなに有名なのか？と疑問をもたれるかも知れません。と言いますのは，歌っていることは何か，きわめて平凡に見えるからです。一度読んでみます。

旅びとの夜の歌

山々は
はるかに暮れて
木ずえ吹く

（4） 人文書院刊ゲーテ全集第1巻68ページ。大山定一訳による。この詩は，1780年9月6日イルメナウ付近の最高峰キッケルハーンの山頂で作られ，そこにあった狩猟小屋の壁に書きつけられた。ゲーテは，1775年に自分より8歳若いザクセン・ワイマール・アイゼナッハ公国の国主になったばかりのアウグスト公の教育者兼顧問のような形で招聘されていたが，もうこの頃には公の信任を得て政治の仕事に忙殺されていた（政治家としての自分と詩人としてのゲーテの矛盾は，戯曲「タッソー」に詩化される）。そうした中，宮廷での仕事などから解放されるために時々こうして山小屋などに来ていた。ここでは，山頂（そんなに高い山ではないが，多くの山々の峰が見える）に迫った夕暮れの中で，自然全体の中を大きく動いてゆく昼間の活動から夜の安らいへの生命の流れを感じ，それを詩化している。遠い山並みから徐々に近くの自然へと収斂しながら，最後は己の心の奥底に同じ生命の動きを感じている。

なお，ゲーテの詩集の中では，この詩の前に似た主題を持つ1776年2月12日エッタースベルクの山中から恋人シュタイン夫人に宛てて送った詩が正式名で載せられ，この詩は，「同じく」と題されている。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ひとすじの
そよぎも見えず
夕鳥のうた木立にきえぬ
あわれ　はや
わが身も憩わん

この詩は，イルメナウと言う町の近くにあるチューリンゲンの森の山並みが続く一角のキッケルハーンと言う峰で歌われました。山々と言ってもチューリンゲンの山々はそんなに高くなくて，最高峰でもせいぜい1,000メートル以下でしょうが，しかし，ここからはいくつもの山々の峰が見えます。そしてこのあたりの山々は皆，山腹が樹林でおおわれています。そうした山々の峰々が今，暮れようとしています。さっきまで風で揺れていた木々の枝もパタッと動かなくなりました。木々の間に忙(せわ)しげに鳴いていた鳥の声も今は，急に聞こえなくなりました。山も，木も，鳥も，みな，今は，安らいの眠りにつこうとしている。ああ，お前も，ちょっと待ちなさい。まもなく眠りにつくだろう。こういう内容です。深い，深い静けさが歌われています。静けさは遠い，山々の峰々からゆっくり，ゆっくりとひろがり，この辺りもすっかりと静かになり，自分の胸の中の奥底まで静まってゆこうとしています。

この詩を読みますと私は，いつも，学生時代のある体験を思い出します。私の友人がある夜やってきまして，何かの拍子に，芭蕉の「古池や，かわず飛び込む水の音」の話になりました。そして友人が言うのは，「君，この静けさやというのが分かるか？」と聞くのです。私は当時さして芭蕉に深い知識がありませんでしたから，「いーや，ポチャンとかえるが池にとびこんだ。その音で，静けさが破れて，かえって静かだったのがもっと深まった，と言うのじゃないのか？」と聞きました。すると，「いやあ，そんな単純じゃないぞ。この静けさというのはだなあ，普通の静けさとは違うんだよ。言ってみれば，宇宙の静けさなんだ。池の回りだけでなく，シーンと静まり返る宇宙の静けさで，芭蕉以前の誰もが聞いたことがなく，芭蕉がこの句で初めて，人間に聞けるようにしたんだよ。」という意味をとうとうと論じ出しました。初めてそんなことを聞いた私は，この句を何度も読み返してみて，宇宙の静けさを聞こうとしました。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

さて，芭蕉の句が宇宙の静けさを表現しているかどうかは知りません。しかし，宇宙とは言いませんが，「静けさや，かわず飛び込む池の音」と言う句は，確かに絶対的な静けさが表現されているように思います。そして私は，このゲーテの詩にも，何か，似たものを感じます。ただし，日本の静けさとはかなり違うものです。ここには，原詩が書いてありませんが，この静けさは，ドイツ語で，「Ruh」と書かれています。物理的な静けさとは違うものです。例えば，誰かが亡くなり，埋葬された場合に，と言ってもドイツでは，土葬ですが，そうした時に，「永遠の Ruh が来るだろう」と言うような意味に使われます。墓の中では，誰にもじゃまされずに静かに休めるという意味でしょう。だから，「やすらぎ」と言うように訳した方がよいかも知れません。そして詩の題名ですが，この詩は，ドイツ語で Wandrer と書かれています。訳は，旅人とされています。しかし，ここでも「さすらう」という訳を使う方が少しは意味がよりよく分かるかも知れません。江戸時代，人は一所に定住しないといけないような決まりがあったようですが，そのせいか，日本では通常，あまり，故郷を出てゆかない人も多いようです。しかしまた，別に，「故郷は遠くで思うもの」と言うような詩句もあります。日本人は，生まれてどこかに行きたいという願望があるのかどうか，よく分かりませんが，しかし人間は，生まれて，一度はどこかにゆきたいのではないでしょうか？ さすらいの情がどこか，心の奥に眠っているのではないでしょうか？ 特に激しく心が動き，何か夢見る青春期には，どこかに行ってみたいというさすらいの情があるのではないでしょうか？ ゲーテは，若いときにしばしば自分を Wandrer と呼びました。こんな話をすると，きっと皆さんも，旅の好きだった歌人が浮かんでくるかも知れません。若山牧水とか，俳人では，四国では，山頭火などが直ぐ頭に浮かびます。そういえば，芭蕉も「漂泊の思い止まず」と言うようなことを奥の細道の冒頭に述べています。こうしたさすらい人，あるいは，漂泊人を考えてみますと，人間の心の奥には，どこか，夢見ており，どこかへゆきたいという思いがあるのでしょう。そして，その夢見るもの，人を旅へと誘うものとは，一体，何なのでしょうか？

一ケ所に住んで生活していますと，様々なことがあります。そしてそれはそれで楽しいのでしょうが，長くなりますと，どうしても心の生命力に汚れのようなものがついてこないでしょうか？ 鉄を鍛える時に出るかなくそのようなものと言ってもよい

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

かも知れません。こうしたものを洗い流したいという願いのようなものがあるのかも知れません。そしてまた，逆に心は，絶対的な「やすらぎ」を求めているとも言えないでしょうか？　わたしには，「さすらいたいという心」と「やすらぎを求める心」は，どこかで繋がり，同じような感情のように思えてきます。

皆さんも，本日は，旅の空の下です。心が敏感になり，日頃の日常感覚とは違う，何か新鮮な漂泊の心を感じておられるのではないでしょうか？

さて，ゲーテの詩にかえりますが，解説にも書いておきましたが，この詩は，直前にもう一つの詩と一ケ所に，つまり同じ題名で２つが並べられており，この詩は，後ろの詩と言うことになります。そして前の詩は，解説にありますが，こう言います。

なんじ　空よりきたり
なやみのすべてを鎮むる者
みじめさの深ければなお
なぐさめの多くを与うる者
ああ　世にかかわりて何せんわれ
かなしみよろこびも果して何
まどかなる平安よ
きたれ　ああきたれわが胸に

この詩を重ね合わすと，私が選んだ方の詩の意味が一層，はっきりとするでしょう。町での忙しい仕事，あるいは人と人とのつきあいから来る様々な心のもつれ，俗事の疲れ，そう言った様々なことから旅に出て，心から，この詩のように，この純粋な生命としての自然に出会う時に，浄福にも似た自然との一致を味わっていただけるのではないでしょうか？　そしてこの詩の最後の句「ああ　世にかかわりて何せんわれ／かなしみよろこびも果して何／まどかなる平安よ／きたれ　ああきたれわが胸に」と叫ぶ心の奥の渇望のようなものを感じていただけないでしょうか？　そして，その感情と山に逃れ来て，静かな峰の夕方にしみじみと感じる自然の大きな生命の流れにそっと包まれた一瞬の詩がぴったりと合うのではないでしょうか？

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

さて，この詩には有名なエピローグがあります。この詩は，ゲーテが31歳の時の詩ですが，それから約51年後，1831年8月27日，これはゲーテの亡くなる半年ぐらい前の82歳の誕生日前日です。孫たちとイルメナウへ旅行しています。孫たちは歩いてキッケルハーンを登っていきましたが，ゲーテは山林監督官マールと一緒に馬車を使って登りました。その目的はほぼ半世紀前に自分が山小屋の壁に書き付けた詩に会うことであったと思われます。マールの語るところによりますと，「ゲーテは山頂に高く生い茂ったコケモモの中を狩猟小屋めがけて力強く歩いていった。そして急な階段を登って2階にゆき，内側の南壁に書いたこの詩をさっと読んだ。涙が彼の頬をつたって流れた。ゆっくりと純白のハンカチを上着から出して，涙を拭いた。そして哀愁をおびた安らかな調子でこの詩の最後の句『そうだ，待てしばし，なれもまた憩わん』と言った。」とあります。この場合，「なれもまた憩わん」は，この詩を書いた若き時とはおそらく全く違った意味を持ったと思います。明確に自分の死を意識していると思います。ゲーテは，若いときにしばしば，心の激しい感情を押さえられず，あちらこちらと漂泊したから，自分を旅人(Wandrer)と呼んだわけですが，しかしここでは，人生のさまざまなことがあった長い道程を旅にたとえ，まさにその旅が終わりに近づいた時に，再びこの詩に出会った。この詩の「なれもまた憩わん」という句は，きっと恐ろしいほどの深い感慨を起こさせたことだろうと思います。

5．ゲーテをめぐる女性たち(5)

さて，閑話休題と題しまして，ゲーテの愛した女性たちの話に少し触れたいと思います。私自身は，女性経験はほんとに僅かですが，もし私が，ゲーテの話をしてゲーテが愛した女性の話をしなければ，「お前はゲーテ研究家だと言っているが，嘘だろう」

---

(5) ゲーテをめぐる女性たちは多くいるが，その中の幾人かを，挙げてみる。

・ケートヒェン・シェーンコップ（当時19歳。ゲーテ16歳）ライプチッヒ大学時代の恋人，居酒屋の娘。詩集「アネッテ」や戯曲「恋人のむら気」のモデル。失恋に終わる。ライプチッヒ時代はあまりに奔放すぎた生活のためある日喀血して失意のうちに帰郷した。

・クレッテンベルク嬢（当時46歳。ゲーテ19歳）母の友人できわめて宗教心の熱い女性。ピエティスム(敬虔派)。彼女に喀血してライプチッヒから帰郷した失意の時期，慰められる。ヴィルヘルム・マイスターの修業時代の「美しき魂の告白」は，彼女との交際から生まれた。またゲーテが中世の錬金術や魂の深い世界へ開眼する機縁になった女性。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

と言われても仕方がないでしょう。ゲーテの詩には，たくさんの愛の詩があります。それも非常に美しい傑作と言われるものがたくさんあります。老年期の詩集「西東詩集」の中核も現実に実際起こった恋人との相聞歌です。また小説，戯曲でも数々の美しい，心を打つ女性が登場します。ヴィルヘルム・マイスターの修業時代や徒弟時代の女性たちは，美しい様々な花束のように個性の違う女性たちがその世界を作っています。ライフ・ワークの「ファウスト」の最後は，「永遠に女性的なるものが我々を引いてゆく」と言う句で終わっています。女性は，ゲーテ文学の中核なのです。そして，それらは，ゲーテ文学がそのすべてをゲーテの人生から生み出したのと同じように，彼が愛した女性たちとの体験が母胎となっているのです。勿論，経験そのままに書い

・フリーデリケ・ブリオン（当時 18 歳。ゲーテ 21 歳）シュトラースブルクの近郊のゼーゼンハイムの牧師館の娘。野の花のように清純な女性。彼女との快活で，清らかで，幸福な恋から多数の叙情詩が生まれた。「五月の歌」もその一つ。彼女との別れは，「彼女の魂を傷つけた」と言う悔恨の情を込めたゲーテの言葉が残っている。彼女は主著「ファウスト」のヒロイン，グレーチェンのモデルと言われる。さんざん，不幸（嬰児殺しまで）に遭わせられながら，死に際になおも「愛している」と叫ぶグレーチェンは，最後にファウストの魂を天上へと迎える女性となって現れ，その姿が永遠に残されている。また，「童（わらべ）は見たり」で知られるゲーテの詩にもこの時のゲーテの悔恨の情が響いている。

・シャルロッテ・ブッフ（当時 19 歳。ゲーテ 22 歳）シュトラースブルク大学を終えたゲーテは，ヴェッツラーで司法見習いをする。そこで婚約者もいる快活で，仲よくせざるえないような美しい女性と知り合い，激しい恋へと落ちた。出口のない恋とて自殺を考えるほどであった。この経緯を他のさまざまな要素と合わせて書いたのが名作「若きウェルテルの悩み」である。この作品が一躍ゲーテを世界的ベストセラー作家にした。詳細は自伝「詩と真実」を参照。後年ロッテは，ゲーテを訪ねたが，トーマス・マンがそれを小説にしている。

・リリー・シェーネマン（当時 17 歳。ゲーテ 25 歳）フランクフルトの裕福な銀行家の未亡人の娘。容姿端麗，気高い気品ある女性で，シュタイン夫人を除けば，ゲーテの最愛の女（ひと）と言ってよい。彼女とは婚約までしているが，結婚という制約におそらく天才的な才能の危機を本能的に感じたのであろうか，婚約解消，同時に未練をたっぷり残してワイマールへの招聘を受ける。彼女との愛から，「新しい恋，新しいいのち」など，恋愛詩の傑作が多く生まれる。

・シュタイン夫人（当時 33 歳。ゲーテ 26 歳。）激しい疾風怒濤の気性に苦しんでいたゲーテを人間的に救済する働きをした女性。長続きしないゲーテの恋の中で 10 年も続き，ゲーテから「汝は前世では私の妻」とすら歌われたほど，愛された女性。ゲーテの恋人はたいていどこかに官能的な魅力をたたえているが，彼女は宮廷女官で，精神的な才能ある女性。ただし彼女は，夫があり，子供も 7 人産み（4 人が死んだ），しかも年上であった。この道ならぬ恋にゲーテは苦しむようになり，イタリア旅行後，ひそかに自分の家に引き入れた若い女性との良心結婚が知れたときに決裂した。しかし彼女は，ゲーテの精神的な発展に重大な感化を及ぼし，戯曲「タウリスのイフィゲーニア」などに美しい精神的女性像として残っている。またゲーテとの間に 1,784 通の恋文が残っている。ただし彼女の手紙は返してもらい焼却されてない。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ているわけではありません。ドイツの作家ハンス・カロッサと言う作家は，「文学は花束のようなものだ。誰が，バラを人に贈るのに，根や大きな茎まで付けて贈ろう？」と言うようなことを言っていますが，ゲーテの体験は，その最も深い，美しい生命のエッセンスこそ，文学化されていると思います。

さて，詩人は，たいていきわめて感受性が強い人種であると思います。ゲーテも勿論その一人です。ですから自然に対しても非常に深く感じたと思いますが，女性に対しても非常に感じ易かったと思います。だからと言うわけでもないのでしょうが，ゲーテはたくさんの女性と知り合いました。そして愛しました。そこから多くの愛の詩や文学作品の女性たちを生みだしました。これだけを聞くとゲーテは，何か，ドンファンのような女たらしのような誤解を招いてしまいますが，実際は違うように思います。

・クリスティアーネ・ヴルピウス（当時23歳。ゲーテ38歳）彼女はゲーテと知り合ったときに孤児で，叔母に引き取られ，造花工をしていた。丸ぽちゃでぴちぴちした若い女性をゲーテはすぐに，家に引き入れた。イタリアから帰ったゲーテは，地中海的な文化雰囲気で若返り，再び芸術家として生まれ変わって帰ったが，ワイマールではなかなか理解してもらえなかった。この無寥をクリスティアーネが慰めた。ゲーテの母は，彼女を手紙の中でずばりと「ベットの宝」と呼んでいる。彼女は長い間，その身分違いのために宮廷の人々から認められなかったが，まったく気にもせず，よき妻としてまたよき家政婦として家を切り盛りした。客が来ると台所に身を隠さねばならないようなことがあったが，くったくなく生き，ゲーテに子供を生んだ。ゲーテは彼女を契機に多くの詩を作っている。エロチックな詩やあるいは後年はよき妻としての女性像として残されている。ナポレオン戦争時，兵隊に踏み込まれて危険だったときに体を張ってゲーテを守り，そのことから結婚して18年後にゲーテは彼女と正式に結婚式をあげたが，息子が祝辞を読み，心ない人からさんざん皮肉られた。しかし，彼女は全く教養がなかったが，ゲーテにとってはよき妻であった。

・ミンナ・ヘルツリープ（当時18歳。ゲーテ58歳）彼女は早くから両親を失い，イエーナの印刷会社のフロムマン家の養女になっていた。ゲーテは小さいときから彼女を知っていたが，美しくなっていた彼女にあって，並々ならぬ愛情を寄せた。彼女は気がつかなかったらしい。彼女は多くのソネットをゲーテに書かせたが，その他，「親和力」のヒロインや「パンドーラ」のモデルと言われている。

・マリアンネ・ヴィレマー（当時30歳。ゲーテ65歳）彼女は，オーストリア生まれのバレーの一座として人気があったが，フランクフルトの銀行家ヴィレマーに養女として引き取られていた。早くから文才を認められ，詩が書けた。1814年ドイツがナポレオンから解放されて，その頃ペルシアの昔の詩人ハーフィーズに関心を寄せていたゲーテは，フランクフルトに旅行し，前から知り合っていたヴィレマー家を訪問した。結婚直前の彼女と文通が始まった。こうしたきっかけで彼女は，ゲーテの「西東詩集」に非常に大きな内容をなしている。中には彼女の詩がいくつか入っている。ゲーテとの実際の愛の歌の交換が少し手直しされて入っているのである。「西東詩集」は日本ではあまり知られていないかも知れないが，老年期の大きな詩集である。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

つまりゲーテは，確かに女性に弱く，女性がいないと一日も済まないような性格でしたし，惚れやすかったし，また間違いなく作家としてのエゴイズムもありました。つまり恋によって文学するという傾向です。しかし，実際は，感受性が強く，すぐ女性を好きになり，心が通じ合えばすぐその感情にどうしてよいのか分からなくほど感情を高めてしまうような気質でした。だから詩にせざるを得なかったというエゴイスティクにも聞こえる傾向がありました。

しかし筆者は，ゲーテの詩がめざす方向を見てみようと思います。後でも述べますが，ゲーテは，詩人として「眼前の生きている生命」をいつも感じていました。「眼前の生きている生命」をいつも尊びました。そして自分の心を動かしたものを詩に変えました。先にも言いましたが，ここがゲーテ文学の原点なのです。ところで，皆様，ありとあらゆるこの世のものの中で，人間の心ほど人の心を動かすものはないのではないでしょうか？　そして男性にとっては，女性の心から清水のように流露してくる心情こそ美しく，心を高めてくれるものもありませんでしょう。また同時に自分の心も純粋な生命へと洗われます。ゲーテにとっては，恋や愛の感情の中で命と命が高まりあい，一瞬であろうと純粋な生命感情へと燃え上がる体験こそ何ものにも代え難いものであっただろうと思います。道路が作られ，自然が次々と破壊されている現在で

・ウルリーケ・フォン・レヴェツォー（当時17歳。ゲーテ73歳）ゲーテは，偉大な才能を持つ人間は「青春を回帰する」と言っているが，ゲーテ最後の恋といえよう。現在はチェコ内の温泉保養地マリーエンバートは，昔から有名な保養地で，夏にヨーロッパ各地から多くの避暑客を集めてきている。トルストイの「アンナ・カレーニナ」にも出てくる。ゲーテも晩年ここによく行っていたが，レヴェツォー家の豪壮な別荘を定宿にしていた。そしてだんだんと美しい女性へと変わってゆく初々しい長女のウルリーケと親しく時を一緒に過ごす時がよくあった。そして1823年の夏には，彼女への愛の感情は高まり，ほとんど若きウェルテルのような絶望的な愛へと高まった。数日の愛の日々をおくったゲーテは，マリーエンバートに滞在中のヴァイマル大公に心中を打ち明けた。若き時に色の道楽を共にしたこともある大公は，ゲーテのために求婚しに行った。もちろん結果は明らかである。この若きウエルテルの時期にも匹敵する心の苦境に落ちたゲーテは，帰途，天啓的に浮かんだ詩句を書き留める。こうして有名な情熱の三部曲ができた。この詩の若々しい詩句に触れた人は，73歳の老ゲーテの胸にどれほど若々しい情念が燃えたか，理解できよう。そしてその後の彼の心の傷を慰めたのは，ピアノの名手シマノフスカヤの音楽であったと言われている。

その他，ゲーテの愛した女性たちはまだまだいる。こうした多くの愛の体験はゲーテ文学の美しい，生き生きした内容をつくり，また数多くの女性の登場人物の中に深い人生の味わいと真実を込めている。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

はなかなか自分の眼で見る機会がなくなりましたけれど，美しい自然に会えば，人の心は動かされ，清らかになり，生きている生命感情が溢れてきます。ましてやそれが女性の心の至純な愛の感情であれば，何をかいわんやでしょう。ゲーテのライフワーク「ファウスト」の最後は，「永遠に女性的なるものが我らをひいてゆく」と言う句です。女性の愛の至純な心の中にゲーテは人間最高の命の美を見たのでしょう。

詩集抄にゲーテの愛した女性たちを少しだけ書いてみました。ここには，ゲーテの母や彼をワイマールへ招聘する大きな推進力となったであろうアンナ・アマーリエも入っていません。また宮廷にはたくさんの女性がいましたし，またイタリア旅行後には，国務は文化事業以外は免除されたのですが，ワイマール劇場にはゲーテ自身大変力をいれ，自作をたびたび舞台にかけるばかりか，自身が例えば，「タウリスのイフィゲーニア」にも出演しています。そうした中で，女優さんもいましたし，他にも色々な女性たちがゲーテの生活圏を飾っています。

また詩集抄にも書いておきましたが，たいていの女性とも，愛（恋）が終わっても，後で手紙を書いたり，作品を贈ったり，訪問したりして，関係を修復しており，円満裡に終わっています。しかし，フリーデリケ・ブリオンに対してだけ，詩と真実で，彼女の魂を傷つけたと言うようなことを書いています。そして学者たちには，ファウスト第１部のヒロイン，グレーチェンのモデルは，彼女と言われています。ファウストの中で，グレーチェンぐらい女性らしい女性はいないのではないのでしょうか？グレーチェンは，ファウストとの愛を貫くために，様々な偶然ごとが重なってですが，親を早く眠らせて恋人を迎えようとして毒薬と知らず，毒を飲ませて死なせ，部屋に入ろうとするファウストと悪魔メフィストを見つけた兄ヴァレンティンを決闘で死なせ，私生児に対して極めてむごくあたった時代ですので，身ごもったわが子を殺してしまい，嬰児殺しで牢屋に入れられます。そして発狂してしまいますが，それでも，ファウストを愛していると叫び続けます。狂女と化したグレーチェンのその叫びに，女性の愛にかける命のような切ない響きを聞く思いがします。そしてゲーテは，ファウストの最後にこのグレーチェンを再び登場させて，ファウストを天上へと導かせてゆきます。ここには，人間の愛の不可思議な変転を見ることと思います。自分の捨てた女性の愛が，深い悔恨の情が何年も時を経た後には，清らかな天上からの愛の姿に

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

変わってゆく。ここには，人間がこれ以上書けないような愛の奇跡が書かれているような気がします。

さて，女性の話はこれぐらいにさせていただきます。次に「植物の変態」の詩にゆきましょう。

6．植物の変態（Die Metamorphose der Pflanzen）[(6)]

戸惑いしてるね，いとしいひと，あれこれまじった
　　この　花の雑沓が　庭中にあふれているし，
たくさんの名を耳にしながら，いつも　つぎから
　　つぎへと　耳ざわりなひびきを　きかされて。
すべての姿が似ている，しかも一つとして同じでない，
　　そこで花の群が　暗示するのは，ひそかな法則，
ある神聖な謎，それをおまえに，愛らしいひとよ，
　　すぐさまうまく，解く言葉が　ぼくに言えたら！—
成長するのを　よくみてごらん，植物が
　　だんだんに，花となり，果となるさまを。
種（たね）から　植物は　発展する，大地の　ひめやかに
　　みのりを与える母胎が，やさしく生命をめぐみ，
萌えそめた　いとささやかな　葉の造りを
　　神聖な　つねに感動している　光の刺戟に委ねるとき
無造作に　力は種子のなかに眠っていた。もえそめた
　　原型は，自己にこもり，外皮にくるまり，
葉と根と芽と，ただ形もなかばで，色もなかった。
　　水気なく　核（たね）はしずかに　生命を守ってきたが，
おだやかな湿り気に身をゆだねて，じくじく萌え出し，
　　とりまいているやみ夜から　たちまち身を起す。

（6） 人文書院刊ゲーテ全集第1巻190ページ。会津伸訳による。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

しかし　はじめの姿は　単純なままなのだ，
　植物の間でも　子供はそうと　すぐわかる，
すぐつづいて　つぎの発芽，一だんと高く新しく，
　ふくらみを重ねながら，依然としてはじめの姿。
でも同じ姿とはかぎらない。あとからくる葉は，
　ごらん，さまざまに生れ，たえずひろがってゆくし，
先端も各部も，一そうひろがり，刻まれ，はなれる，
　さきに下の組織のなかで　休んでいたものが。
こうしてひとまず，じつに確たる完成に達すると，
　多くの種属にそれをみて　おまえはびっくりしている。
多くの葉脈ができ，裂目がつき，葉の面がふくらむ，
　その充実した発芽の力は，自由で限りないらしい。
だが　ここで自然は　ぐいとばかり　成長をとめ，
　より完全な形へと　おだやかに操ってゆく。
より控え目に　樹液をおくり，その管をせばめ，
　同時にその姿は　よりこまやかな効果を呈する。
縁(へり)のひろがる成長力が　しずかに退いて，
　葉の葉脈が　ひとしお完全に　発達する。
しかし葉なしに，すうっと細目の茎が　伸びてきて，
　ふしぎな光景に　みつめる者を惹きつける。
まるい環をなして　きまった数で，しかも数かぎりなく，
　似たような　より小さな葉が　ならび合う。
ぴったり　茎のまわりに　萼(がく)がきまって　守るが，
　萼から　色あざやかな花冠が出，最高の姿となる。
こうして自然は，高く充実した姿を　誇らかにみせ，
　整然と　部分部分が　よくならぶさまを示す。
いつもおまえは　おどろくね，茎についた　花が
　入替り生える葉を　たおやかな足場として活動すると。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

しかし　この美しい花が　新しい創造の予告となる。
　ほんとだ，色あざやかな花びらは，神の手を感じ，
やがて　急にしぼみ，一ばんきゃしゃなのが，
　ひと一倍つき出て，合わさり，柱頭となる。
そこで心おきなく，やさしい組となって，あまたの
　花びらが，きよき祭壇のまわりに　立ちならぶ。
ヒューメン[7]たゆたい来り，かぐわしい香りが
　つよく　甘く　みなぎり，すべてを生き生きさせる。
すると個個に，無数の胚芽が　すぐさまふくらみ，
　ふくらみゆく実の母胎のうちに　やさしく守られる。
そして　ここに自然は　永遠な　力の環をむすぶ。
　けれども　新しい環が　すぐさきの環に接して，
この連鎖が　つづいてあらゆる時代を　つなぎ，
　全体が　個個のものと同じく，生きてゆく。
さあ，いとしい者よ　色とりどりの群を　みでごらん
　それはもはや　もつれゆらいで　みえはしない。
どの植物も　いまやおまえに　永遠の法則を示し，
　どの花も　いよよ声高く，おまえと語っている。
だがここでおまえが，女神の聖なる文字の謎をとけば，
　いたるところ　その文字をよむ，筆跡はちがっても，
毛虫はためらいがちに這い，蝶は忙しげに舞うとも，
　人間が　定められた姿を　みずから作り変えても。
おお　ほんとうに　考えてごらん，相知った芽生えから，
　だんだんに　ぼくらのうちに　優しい習いが生れ，
ぼくらの内なる心に　力づよく友愛の情があらわれ，
　そして愛の神（アモル）が　ついに花と果を　下さったことを。

（7）　原注。婚姻の女神。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ごらん，なんとおびただしく，あれこれの姿を，
　自然がぼくらの情感に　そっとひろげてみせるのを。
きょうという日を　よろこんでおくれ！　聖なる愛が
　気の合った者の　最高のみのりを　目ざしてゆくし，
すべてに考えをひとしくして，調和せる直感のうちに
　夫婦とむすばれ　より高い世界を見出そう。

この詩に歌われている植物は，たぶん，一年草でしょう，その植物がどのように成長してゆくのか，恋人に教えている詩です。植物がどんなに成長してゆくかを実に細かく見ています。

さて，ゲーテは，この世界を動かしている生命の流れの根源力を地霊 (Erdgeist) として，ファウストに登場させています。その詩句は，以下の通りです。

地霊「生命の潮(うしお)の中を，行為のあらしのなかを，
　大浪のうねりのように逆巻きながら，
　かなたへゆき，こなたへかえる。
　誕生の床と死の墓場，
　永遠の海原，
　行きては帰る休止のないいとなみ，
　もえあがる生命(いのち)，
　かくておれは「時」のざわめく機(はた)を織る。
　神の生きる衣(ころも)を織る。[8]」

最後の「神の生きる衣(ころも)」と言う語句に注意していただきますように。ゲーテの眼には，世界は，神の生きる衣なのです。植物も，動物も，人間も，すべて自然は，生きています。そしてそのどの生命活動にも神の力の顕現(けんげん)を見るというのが，ゲーテの基

(8) 人文書院刊ゲーテ全集第2巻21ページ。大山定一訳による。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

本的な世界観です。この観点から見れば，例えば，今まで取り上げてきましたどの詩の世界もこうした休止のない生命の動きを捕らえており，ゲーテの眼は，その一つ一つの命の根源に向けられています。もちろん，詩句にあるように生命活動は絶えず動き，初めの詩のトンボではありませんが，人間の手には捕らえられません。もし捕らえたと思ったら，もうその肝心要(かんじんかなめ)のものはスルリとどこかに姿を消してしまっていることでしょう。

ゲーテは，若い時からこうしたダイナミックな生命観を持っていましたが，ワイマールに招聘されて政務から実際さまざまな自然科学領域に引き込まれました。植物学で言えば，当時は近代薬品もない時代でしたから，例えば，リンドウなど薬草の研究が盛んであったわけです。そうした関連からゲーテも植物学に入っていきました。

詩人ゲーテの眼には，リンネの植物の分類を教えられても逆に互いの植物はきわめてよく似て見えました。生命活動の根源を見る詩人の眼にあらゆる植物が似て見えたのは不思議ではないでしょう。長年ゲーテは，植物観察を続けましたが，植物は互いに似ているという直感は消えませんでした。そしてそれは，1786年イタリアへ自分の詩人としての再生をかけて出た旅行中に，南の暖かい地中海地方で見る植物の豊かな植生(しょくせい)をみて，確信に変わりました。簡単に言うと，ゲーテは，あらゆる植物は，元来は同じものではないかと言うのです。松などのようなものも，一年草のようなものも，元来同じもので，生育環境の相違が植物の形を変えていったのではないかという考えなのです。ダーウインの進化論の前段階のようなこの考え方は，上で説明しましたこの地上のものはすべて神の生きる衣(ころも)と考える詩人の眼から生まれたと思われます。さらにゲーテは，だからこの世には，あらゆる植物の根源的な植物（原植物(ウーアプフランツェ)）がまだこの世界のどこかに生きていると考えた程です。そしてその植物の根源同一性をゲーテは，葉に見ました。双葉，次に出てくる葉，そして萼，雄しべ，雌しべと通常の一年草は生育して行きますが，これらは皆，葉の変形であると考えました。いわば根源的な葉，ドイツ語では，Urblatt(ウアブラット)が，絶えず生命活動としてその形を変態し続けました。人間の眼から都合よく見れば，一年草は，花を咲かす姿が最も理想的なのでしょうが，植物は，絶えず姿を変えている化け物とでも言った方がよいと思います。だから種(たね)の，土くれのようなあまりぱっとしない姿も，生き生きした双葉の姿も，あるいは開花し

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

た豪華な姿も，あるいは自ら枯れながら，実へと結実して行く姿も植物の変態なのです。こうした眼で，是非，皆さんも自然界を見ていただきたいと思います。そうするとこの世は，きっと命の海に見えることでしょう。そしてその大海の一滴が私であり，皆様でもあるという世界観に至るのではないでしょうか？

ゲーテは，植物だけでなく動物にも同じような変態の姿を見，それを骨の構造に見ています。例えば，動物の骨の根源的な構造は同じであると考えています。当時，猿と人間は違い，その違いは，顎間骨が猿にはあるが，人間にはないと考えられていましたが，癒着して見えにくかった顎間骨を発見[(9)]しています。また頭蓋骨なども複数の脊椎骨の変形から生じてきたということも見抜いています。

それ以外でもゲーテの自然観察はとどまるところを知らず，さまざまな領域を研究しては著作をものにしています。例えば「色彩論」など。これも皆，ゲーテは，この世のありとあらゆるものは，地球でさえ，生命であると見，そうしてその生命が顕現してくる点こそ不思議に思い，神を見たのだと思います。先に言いましたように汎神論です。是非ゲーテの眼で自然を見て下さい。あるいは，人間の心の中に起こっているものも同じ眼で見て下さい。きっと，輝かしい生命力の壮麗な世界を想像できますし，そしてどんな小さなものにも生命となって形を求めながら，この世へと生きて来ようとする不思議な力を見ると思います。そしてその力こそが，あらゆる自然を生かし，皆様も生かしていると考えると，なんだか生きる元気が出てくるとは思わないでしょうか？

7．「変転の中の永続」

さて，次に最後の詩，「変転の中の永続」にゆきましょう。「永続」は，「持続」と言っても同じことです。訳の違いです。先ず，読んでみましょう。

変転の中の永続 (Dauer im Wechsel)[(10)]

---

(9) 後にゲーテが第一発見者でないことが分かり，発見者の名を失っている。
(10) 人文書院刊ゲーテ全集第1巻194ページ。高安国世訳。1803年以前の作。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ああこの春のよろこびを
ひととき引きとめることができたら
だが暖かな西風が早や
揺りこぼす花びらの雨
では涼しい蔭めぐむ
若葉青葉をたのしむべきか
やがて木枯らしがそれをも吹き散らすだろう
秋が来て木の葉が黄ばみ揺らぐときに

木の実を取ると手をのべるなら
分け前をいそいで取るがよい
枝に木の実の熟す下から
もう次の芽がきざしてくる
ひと雨ふるごとに早や
したしい谷のすがたも変る
ああ　そしてきみの浴(ゆあ)みする
流れさえ二度と同じではない

さらにきみみずからも！　岩根のように
たしかにきみの前に立つもの
城壁も　宮殿も
たえず異った眼できみは見るのだ
かつて口づけにすこやかなよろこびを
味わった唇も今は消え去り
岩から岩へ　かもしかとその素速さをきそった
足さへも今はいずこに

よろこびをひとに与えて

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

まめまめしく　やさしかった手
美しくととのった体
すべてはもとのままではなく
あの場所で　今は
きみの名をもって呼ばれるものも
波のように来て
波のように四大にかえる

初まり　終わりを
一つに融け合うにまかせよう
物の過ぎゆき滅びるより
速(すみや)かにきみみずからを過ぎさせよう
ただ感謝せよ　詩神の恵みに
滅びてゆかぬものあることを
きみの胸のなかにある愛と
きみの精神のうちにある形と

この詩は，1803年以前の作です。内容は，私がもう何度も述べてきたものの繰り返しのように聞こえることと思うでしょう。ゲーテの自然観の根本です。日本人の無常観に非常によく似ています。しかしよく見ると，無常観とはやはり違います。「人間の回りの外にある世界は，絶えず変転し，命あるものは必ずこの世を去ってゆくが，この世は絶えず生命の営みが続く。その永遠の姿こそ美の根源であり，それに触発されて愛や詩が生まれる。」と言うものです。

ここで，私は，ファウストの第2部の冒頭近くにある句を引用してみたいと思います。そこでファウストは，深い眠りからさめて，身を起こします。朝で，太陽が登ってきます。ファウストは，最初，直接に太陽を見ます。しかし太陽の光がまぶしくて，見ることに耐えられません。こうして，ファウストは，太陽が照らす自然の景色を見て楽しみます。ここに，世界の根源的なもの（太陽）を直接見ようとする世界が終わ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

り，永遠なるもの（太陽の光）が自然の中に反映するものを見る世界が始まります。ここから，太陽に背を向けて，光に輝く自然を見る世界が始まります。

さて，こうしてファウストは，多分アルプスの山に懸かる滝を見ます。滝にかかる虹を見ます。ここに，—多くの学者が指摘していることですが—この詩の「変転の中の持続」を見ると言われます。

皆さん，滝を想像して下さい。激しく流れる滝の水を想像して下さい。そしてその滝の水の落下に太陽の光が落ち掛かると虹が生じます。この世は，よく川にたとえられます。水の一滴，一滴は流れてゆきます。ちょうど，この世に我々人間が一人，また一人と生まれてき，この世を去ってゆくように。そして万物の母，太陽の光が注ぐと虹がかかります。この世に絶えず，美しい形や愛が続いているように。我々の一人一人の命は，きらっと一瞬，輝きながら，落ちていっても，この世には絶えず，生命の虹がかかっていましょう。その不思議こそ，永遠の法則と言えるのでしょう。この詩の最後の句にある「滅びてゆかぬものあること」がそれを指しています。我々は，この法則の中に生きています。そしてその法こそ，我々を生かしているのではないのでしょうか？

さて，締めくくりの言葉として，最後にゲーテの辞世の言葉と言われている「もっと光を」について述べさせて下さい。これは，誤解されている節があります。つまりゲーテは，死ぬ直前まで意識がしっかりとしており，亡くなりました。その部屋が少し暗かったのでしょうか？　もうちょっと明るくして欲しかったのでしょうか？　それで「もっと光を」と言ったのだと言われています。しかし，実際はそうでも，この言葉は，なんとゲーテ的なのでしょうか？　生命に眼を向け，生命の形成されてくるものを見続け，一生，生命に満ち満ち溢れる自然に頭を下げ続け，尊び続けました。この姿勢が死に際にも思わず出たことは，ゲーテ的と言えるでしょう。絶えず，自然のように光に眼を向けた姿勢こそ，ゲーテの姿勢だったと言えるでしょう。